

熱海のホテル兼住宅の設計

— 自然景観地と地形を活かしたホテルの設計手法 —

1. 研究の背景と目的

静岡県熱海市では丘陵や海など豊かな自然景観を有している。その自然景観の美しさに高台から相模湾を臨む温泉宿は江戸時代からつくられていた。その一方、急勾配な地形条件に構造体・施工コストに関する負担が大きく、また旅館・ホテルに関しては建築基準法の厳しい条件をクリアしなければならない。本研究では、熱海の丘陵地における敷地課題や特殊建築物の設計条件について解決をしながら、自然景観と地形の特性を活かした住宅兼ホテルの設計とインテリア計画を行う。

2. 研究対象

研究の対象は、熱海市熱海の第二次風致地区におけるホテル兼住宅の設計計画である。また、「熱海」という言葉は、「熱海市都市計画マスタープラン」で指定されている「熱海1」「熱海2」の区域を対象とする。

3. 熱海市における特性調査

2-1. 静岡県熱海市について

古くから温泉地として都市形成が行われる中で、江戸時代には相模湾の眺望を取り入れる

ために高台に計画された「楼」や「亭」といった建物が存在していた。現代では質の高いプライベートホテルが高台に建てられている事例がいくつか見られることが分かった。また下田市が行なっているアンケート調査・統計より観光客は2~3人の小規模なグループが多く、現代は車での移動(観光)の割合が増えていることも明らかになった。

2-2. 計画地における景観調査

遠景に相模湾を超えた対岸の城ヶ島や大島、中景に真鶴半島や網代などの岬、錦ヶ浦や海岸の砂浜などを見ることができ、これらの景観の海岸地形の美しさを谷文晁が描写していることから当時から相模湾を臨む優れた景観を評価していることが分かった。(図1)

2-3. 計画地における地形調査

熱海市は富士火山帯中に含まれ、地盤運動の転位による海底地盤の露出と火山活動による堆積物によって形成された地形であり、計画地は海岸から近い場所でありながら海拔標高約190~200mの高台に位置していることが分かった。

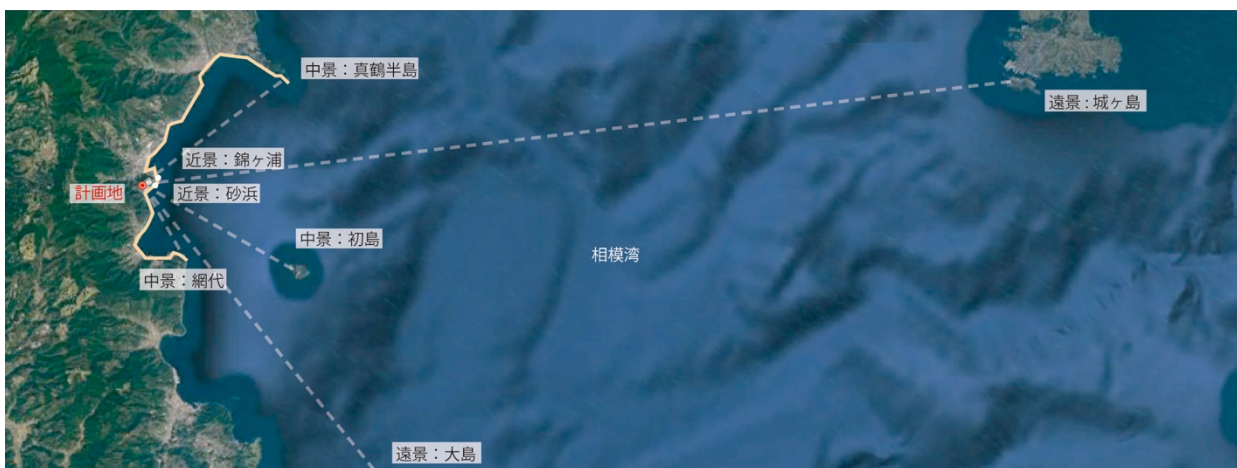


図1 計画地と計画地から見える景観

4.提案

以上の調査をもとに下記の事項を基本方針とする。

- 1) 急勾配の傾斜地に対応した計画
- 2) 自然景観に調和しながら、建物全体がサインとなるような外観計画
- 3) 相模湾の景観が主役でありながら、各部屋の個性を出すカラーのインテリア計画

4-1. 法規課題・コスト縮減への対応

現況の計画は3階建であり、建築基準法第27条第1項の規定により特殊建築物として、耐火建築物としなければならず、施工実現性の低下や躯体コストの大幅な増加が考えられる。階数を2階とすることで法規の該当基準から回避し、躯体数の減少と全体の仕上げ材の減少からコストの縮減を可能とした。

4-2. 立面計画

自然景観に調和しながら、建物全体がサインとなるような外観計画として周辺の環境の色である「青（空、海）」と「白（雲、波）」を用いてパターン構成を行い、小規模なホテルでありながら遠くから見て「晴空」と分かるファサードデザインとした。



図2 外観イメージパース

4-3. インテリア計画

相模湾の景観が主役であり、各部屋の個性を出すカラーのインテリア計画としてそれぞれの部屋名にちなんだルームカラーに合わせた仕上げ材を選定し、観光客が別部屋にも泊まりたくなるインテリアデザインとした。



図3 インテリアイメージ

4-4. サイン計画

ファサードデザインのパターン構成を連続させ、フロント部分に内部のカラー要素を取り込むことで晴空の建物を表現しながら建物の一部となる館名サインとした。部屋名のサインについてはドアのカラーと一体となったデザインとした。

5. 計画・施工イメージ

計画のイメージについて模型作成及びCGパースの作成を行った。



図4 外観模型 (S=1/100)

5. 結論

以上の計画によって熱海市の自然景観地と地形を活かしたホテルの設計手法を実現した。これは高台から相模湾を一望し内部空間にまで景観を取り込むプライベートホテルが熱海における温泉地のリゾートホテルのひとつのあり方を示していると考えられる。